

る生態的土地利用の可能性を追究すべきであると考える。

〔参考文献〕 1) CHIDUMAYO, E.N. (1983): Urbanisation and deforestation in Zambia. *Desertification Control* 9, 40-43. 2) 掛谷 誠・杉山裕子 (1987): 中南部アフリカ・疎林帯におけるベンバ族の焼畑農耕-チメネ・システムの諸相-: 象徴と社会の民俗学-筑波大学創立10周年記念論文集, 雄山閣, 111-139. 3) KNAPP, R. (1973): *Die Vegetation von Afrika*. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart 626 pp. 4) Misamfu Regional Research Station (1987): SPRP research report 1983-1986. Kasama, Zambia, 84 pp. 5) NAIR, P.K.R. (1985): Classification of agroforestry systems. *Agroforestry Systems* 3, 97-128. 6) The Zambian Agroforestry Task Force and the International Council for Research in Agroforestry (1986): A blue print for agroforestry research in the unimodal upland plateau of Zambia. 128 pp.

新刊紹介

◎熱帯におけるマツ類の病害と障害 (IVORY, M.H.: *Diseases and Disorders of Pines in Tropics—A Field and Laboratory Manual*. (Overseas Research Publication No. 31) Oxford Forestry Institute, 92 pp., 1987)

熱帯において導入種を含むマツ類に多種類の病害が発生して、しばしば問題にされてきた。本便覧は、これらの病害について、筆者による現地調査と、既往の報告から得られたデータに基づいて編集されている。豊富な内容が簡潔にまとめられており、熱帯マツ類の樹病に関心を持つ者にとって、その認識と診断に必備である。

内容は、① 病害、② 障害(栄養・環境条件による)、③ 動物害、④ 菌根、⑤ 二次的菌類の順で述べられ、その他に文献表と付録(熱帯でのマツ類の種、主要マツを侵す病害数、診断の具体的方法)が添えてある。

本書の第1の特徴は、「病害と障害」の書名にもかかわらず、病害についての記述が量的にも主体であることである。その他の被害や生物については、ページ数も少なく、それらの存在や役割を概説したに過ぎない。それらをあえて記述したのは、著者が「まえがき」でも触れているように、病害を診断する際、単独にまたは病害と複合して発生する他被害・生物との区別が必要であることを強調したかったからであろう。記述された病害は、① 種子の病害(概説のみ)、② 苗立枯病、③ 根の病害(10種類)、④ 針葉・緑色茎の病害(12種類)、⑤ 樹幹の病害(6種類)である。

第2の特徴は各病害についての記述法である。病徴、宿主、分布、伝染、被害、防除、病原菌、文献番号の順で述べてあるのが珍しい。普通、被害や分布は最初に、また病原菌は病徴の次に置かれるものであるが、診断に便利のようにこうした配列がなされたものと推察する。病徴が箇条書きで説明されているのも注目される。なお、主要病害の病・標徴がカラー写真で、また主要病害菌の形態がスケッチで載せてある。

第3の特徴は、二次的に寄生する菌類についての章が特別に設けられ、13ページを費して26属または種の糸状菌が記述されている点である。これらの菌は菌学的にも興味がある。診断の際、これらを病原菌と区別して腐生菌と断定でき、本記述は極めて役に立つだろう。(周藤靖雄)